

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	呉 若彤
論文題目	豊島与志雄文学における台湾書写 —昭和十七年の台湾旅行とのかかわりを中心に		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、作家豊島与志雄(1890-1955)が1940年代に発表した諸作品の台湾についての記述(書写)を研究対象としている。序章では、申請者は、豊島与志雄が1940年代前半、度々中国と台湾を訪れ、これらの地域を作品に取り上げたことを指摘し、1942年「文芸銃後運動」の名の下に、佐多稲子らと台湾を訪れ、同島を一周して各地で講演会を開き、現地の人々と交流したことに注目する。申請者は、台湾側の人々が豊島ら訪台作家に寄せた期待や彼らとの交流が豊島の創作行為に影響を及ぼしたと主張し、①人間同士の心象・思考を虚構の作品に織り込んでいく豊島の手法や、②豊島が発信した特性の異なる文体による台湾書写の内容の考察が必要であると説く。</p> <p>第一章は、虚構作品に人間同士の心象・思考を取り込む前述の手法の作品として、豊島の初期の作である「蠱惑」(1914年3月)を取り上げる。申請者は、この作品がエドガー・アラン・ポオの「ウィリアム・ウィルソン」から分身譚のモチーフを借りる一方、ベルギーの神秘主義作家モリス・メーテルリンクの“La vie profonde”の影響を受け、主人公は神秘的な超現実には救済を求め、精神の苦悩から立ち直ることが示唆されている、とする。また申請者はこの作品の背後に、豊島自身のデカダンな生活とそこからの脱却の経験があったことを指摘し、「蠱惑」は自己の内面の葛藤という心象の一部を作品化したものだ論じる。</p> <p>第二章は、豊島の台湾関連主要2作品のうち、「台湾の姿態」(1942年6月)を論じる。同文で豊島は、台湾の自然や文化の現状に目配りし、台湾東部について詳細な自然描写を行うのだが、申請者はこの台湾東部の描写が『台湾鉄道旅行案内』(総督府鉄道局編)の記載とほぼ合致することから、台湾側の発信に沿って紹介をなしたものと評価する。さらに、豊島の一連の台湾関連の作品は、彼と交流した台湾在住の知識人の要望に基づいた創作行為であり、彼らの要望及び期待を作品化したものであると述べる。</p> <p>第三章「豊島与志雄「光を育てる人々」に見る台湾像」は、「台湾の姿態」と同月から連載が始まった「光を育てる人々」(1942年6-12月)を取り上げる。この少年向け読み物は、台湾文化の貧弱さを象徴する「淋しい夕方」が少年たちの中で話題になるが、やがて少年たちが台湾の在来文化(建物や土着信仰など)に興味を寄せ、また島独自の遊びを考案することなどで「淋しい夕方」が解消されていく、とのストーリーを辿る。この作品は雑誌の編集方針が「童心主義」から「錬成主義」へと変わったため、豊島は連載を中断するのだが、このことに申請者は、豊島のリベラリズムを見出している。</p>			

第四章は、「台湾の姿態」の台湾観察には異なるもう一つの性質（豊島自身の言う「文学ノート」）が込められており、それが少年向け読み物「光を育てる人々」の中に援用されたことを、二つの作品の共通項と異同項を対照することで確認し得た、と主張する。さらに申請者は、豊島は自らが定義する現実の問題を解決する仕組みと意図を文学作品の中に描き、「文化台湾の創出」という理想を少年の世界で実現させようとしたのだ、と考えている。「台湾の姿態」が脱稿した同月の6月から「光を育てる人々」の連載が始まったのは、前者で確認できた台湾の現実を土台に、作者の理想を物語の中で膨らませる意図があったからだ、と論じる。

第五章は、「台湾の姿態」の単行本収録（1943年2月）時、豊島が「〔台湾に〕大きな熱情が湧けば、文化台湾の性格もやがて創り出さるるだろう」と述べたすぐ後に、「所謂台湾ボケなども克服されるだろう」との一文を付け加えたことに注目している。「台湾ボケ」とは、当時台湾に渡った日本人が倦怠感・注意散漫・不眠・癩癩などの症状を見せる「熱帯性神経衰弱」の俗称である。しかし、豊島は台湾書写の中で内地人の「台湾ボケ」の形象を全く語らないのに対し、台湾本島人については鈍感さ・怠慢さを記し、作品には知覚的に鈍感であったり、逆に「台湾ボケ」を意識し克服しようとする台湾少年が登場する、と申請者は主張する。当時の一般的用法とは異なり、豊島はこれを台湾人（本島人）の症状として用い、連載の中断がなければ、「台湾ボケ」の克服に関連するストーリーが「光を育てる人々」で展開される筈だった、と大胆に推測するのである。さらに申請者は「光を育てる人々」擱筆後にも、「台湾ボケ」の治った本島人を作品に登場させる意図を有していた、それが「秦の憂愁」（1944年11月）であり、この小説に挿話として登場する「厳格な訓練と規律」の下に日本軍の農場で働く「本島人の青年たち」だとする。申請者によれば、彼らこそが豊島の「理想」としての本島人像であり、彼の言う「台湾ボケ」はここに克服されたとするのである。

終章は、本論文を台湾在住の知識人との交流が豊島の台湾書写や認識に及ぼした影響を考察する論考と位置づけ、知識人たちの訪台作家に寄せた期待や希望への豊島の回答が「主調音」となっていると述べ、そのほかの論点をまとめている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、東京帝国大学在学中に芥川龍之介らと第3次『新思潮』に加わったことや、フランス文学の研究・翻訳で知られる作家豊島与志雄が1940年代前半に公表した、台湾に関わる記述(書写)を中心に考察したものである。豊島はこの時期、数次にわたって中国と台湾に旅行をしており、従来の研究はこれらの体験をもとに彼が戦後「近代伝説」の諸作品を生み出したことなどに注目してきたが、彼の戦時期の作品、とくに台湾旅行に関わるものはほとんど考察してこなかった。ゆえに申請者は、豊島文学の全貌を明らかにするためには、この研究史上の空白を埋める必要があると説き、豊島の創作手法を理解するために、第一章で彼の初期作品である「蠱惑」(1914年3月)を取り上げ、第二章以下で、彼の台湾での足跡を克明に辿り、台湾関連の作品として主要な紀行文「台湾の姿態」(1942年6月)と少年向け読み物「光を育てる人々」(1942年6-12月)、そして小説「秦の憂愁」(1944年11月)を考察している。

申請者は、豊島らが台湾を訪問し、各地で講演会を開くなどの際に台湾側と対話を重ね、その結果「台湾在住の知識人の願望や思考など台湾民衆の声」と「訪台側からの反響が交錯」した、こうした「交流の所産」が豊島の台湾書写と台湾認識に影響を及ぼした、とする議論を展開する。さらに台湾側の「願望」や「声」に応え、豊島は「文化台湾の創出」という課題を見出し、これを作品に反映させたのだ、彼の理想の台湾人の形象は最終的に後年の「秦の憂愁」の中で描かれた、とする。この議論は、本論文の中で一貫しており、申請者独自のものとして評価されるべきである。

また紀行文「台湾の姿態」の単行本収録の際、その末尾に加えられた「台湾ボケ」の克服についての1行に申請者は注目する。当時の日本語の「台湾ボケ」とは新聞記事の用例に見る限り、台湾にやって来た日本人が罹患する神経症の症状のことなのだが、申請者はこれをもともと台湾に居住する本島人の鈍感さや怠惰のことだと断じ、豊島の作品からそのことが論証できると述べる。この議論は、少なくとも申請者にしかなし得ない見解提起であることは確かである。

ただし、本論文には、以下のような問題を指摘できる。第一に、申請者は、「台湾在住の知識人の願望」「台湾民衆の声」と語るが、論文で引用されている発言は、すべて日本人のものであるし、「民衆の声」とは言えない。もしも、彼らの「願望」や「声」に応じて豊島が「台湾ボケ」の克服を提起したとする申請者の主張が正しければ、豊島は日本人の要望に応え、台湾の本島人に鈍感さや怠惰の克服を求めたことになる。それは、植民地における支配一被支配関係を全く捨象した議論にとどまる。第二に、申請者は小説「秦の憂愁」に「厳格な訓練と規律」の下に上海近郊の日本軍農場で働く「本島人の青年たち」が登場することを指摘し、彼らこそが豊島の「理想」としての本島人像であり、彼の言う「台湾ボケ」はここに克服されたのだ、と主張する。しかし、日本軍の統制下に働く本島人青年がいかに「厳格な訓練と規律」に服し

た存在であろうと、それは帝国支配に帰属した青年たちの存在を示すにすぎず、「文化台湾」とは何の関係もない。しかも、この小説で、彼ら台湾青年たちは「もう台湾に帰る気持ちもない」と説明されているのである。

しかしながら本論文が、先行研究には見られない視座から、従来の豊島文学研究における欠落を補い、独自の見解をテキストの読み込みと一定の論理性をもって主張したことは認められる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年12月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 3 年 4 月 1 日以降